五感で味わう敬老園の食事 ～栄養部から～ その20

「おいしい」が いつも、そばにある
～旬の食材を楽しむ～

法人本部　栄養部 上田市常磐城2256-1

敬老園では、「食」への思いのひとつとして、季節を感じる地産食材をお出ししたいと考えています。特に野菜と果物は、地元で採れた旬の食材を少しでも多くお出ししたいと思い、仕入れの工夫をしています。

春を感じる食材として、いちご、アスパラ、たけのこ、春きゃべつ、新玉ねぎなどがあげられます。その中でも、ふっくらと丸く赤色のいちごは、目にしただけでワクワクした気持ちになってきます。

今年の春は、上田市内の「上田 道と川の駅 おとぎの里」の契約農園で採れた旬のいちごを3月から数回仕入れ、いただいています。昨年秋には、同様にりんごもいただきました。

昨年から感染症予防のために外出や外食をする機会がとても少なくなりました。ステイホームの時間が長くなり、私たちの生活に様々な制限が入って窮屈な気持ちになることもあります。それでも、そんな時こそ、「食べる」をもっともっと楽しんでいけたら、毎日を新鮮な気持ちで過ごせるのではないかなと思います。

季節の移り変わりとともにおいしく実っていく食材を、これからもお出ししていきたいと思います。

法人本部　栄養部 小林・中山





編集後記

コロナで会う事ができない日々。電話で、娘さんと話す女性入居者A様。「私は、大丈夫だから頑張りなさい。」その言葉に“母の強さと優しさ”を感じました。会って話す日常が早く戻ることを切に願って。（倉島）

地域とのコミュニケーション情報発信紙
敬老園便り
第32号
令和3年4月1日発行
【編集・発行】敬老園本部／〒386-0027 長野県上田市常磐城2256-1 2F　TEL.0268-28-1170（代）



設立 1973年（昭和48年）5月

p1-2　上田福祉敬愛学院閉校
p3　チーム敬老園
p4　上田市西部地域包括支援センター受託
p5-6　写真コンテスト
p7　五感で味わう敬老園の食事

敬老園の理念

少子高齢化の進展に伴う様々な問題に、地域に根ざした社会福祉法人として三つの理念を掲げ、役職員が一丸となり社会貢献を致します。

敬老園は人間の尊厳を大切にし、柔軟な心をもってあらゆる可能性のある質の良い介護を目指します。

敬老園は公平公正な施設運営を旨とし、変化する時代を的確にとらえ社会に貢献する健全な経営を目指します。

敬老園は心と心の結びつきを基本とし、取り巻く全ての関係を誠意と熱意をもって構築することを目指します。



介護福祉士養成施設
上田福祉敬愛学院
第14期生の卒業を見送り歴史に幕

これまでに360名の卒業生を輩出した上田福祉敬愛学院は、令和3年3月5日（金）卒業式並びに閉校式を執り行いました。斎藤理事長が卒業生ひとりひとりに卒業證書・専門士称号を手渡し、「上田福祉敬愛学院の卒業生としての誇りと感謝の気持ちを大切にし、希望に満ちた人生を歩んでいただきたい。」とエールを送りました。

卒業生代表の市川妃奈子さんは、「学院で学んだからこそ、今の私がいます。心と心の結びつきを大切にし、誠意を持った介護福祉士を目指します。」と凛とした表情で挨拶をしました。

本学院は2006（平成18）年の開学より、14年間に渡り県内外の高校生、社会人、また留学生より志願をいただき介護福祉士の養成を行い、360名の卒業生を輩出して参りました。

近年の少子化に相まって高校生の大学志向の上昇が続き、今後も学生確保がより困難になると判断し、誠に不本意ながら2019（平成31）年度入学生の受け入れを最後に学生募集を停止し、令和3年3月31日をもって閉校いたしました。

開学からの歴史を振り返りますと、介護実習、研究発表会、施設でのボランティア活動、清掃活動、研修旅行など、どの学年にも昨日の出来事のように思い出される数多くの想い出があります。ただ、本学最後の卒業生につきましては、新型コロナ感染の猛威で学内行事のほとんどを中止せざるを得なくなり、2年間の思い出と充実感に浸ることなく、巣立っていくことを余儀なくされました。閉校にふさわしい最後を飾る行事や活動の機会を提供できなかったことが悔やまれます。

私は学院では主に対人援助に関する講義を担当してきました。学生と過ごした年代は異なりますが一貫してきたのは、対人援助の実践課題として、私が医療現場で医療ソーシャルワーカー（以下MSWと言います）として勤務していたときに経験した事例を紹介してきたことです。

〈事例：施設を断られた老人〉

MSW時代に担当した患者さんが、紹介した特別養護老人ホームから（以下、特養と言います）受入を拒否されました。拒否理由は感染疾患が疑われたことです。当時は特養数が少ない一方で、特養の待機者は年単位でベッドが空くのを持つ状況が恒常的であり、ことさら面倒な老人を引き受ける必要はありませんでした。ですから、他の特養を当たっても結果は同じでした。困り果て諦め半分で相談した特養が予想に反して、その患者さんを引き受けてくれました。

私が感謝の言葉を述べると、その施設の理事長さんが、「あなたのために受け入れたのではありません。困っているのは、あなたではなく、あなたの後ろにいる患者さんです。困ったときの施設です。」と言われました。その一言は40年を経た今でも胸から離れません。

大切なことは、「他者への関心」「断らない相談支援の実践」そして「誰のための」「何のための」福祉なのかを常に考えることの必要性です。

介護職は介護を必要とする人に、必要な介護を提供することを職務としています。ただし、その根幹に社会的に弱い立場におかれやすい人の権利を擁護する姿勢がなければ、介護は介護する側と介護を受ける側の介護関係の差別や偏見を生み出し助長するものに変容しかねません。介護の実践には「これでよい」のではなく「これでよいのか」を自問する姿勢を忘れてはならないこと、それを学生に学んでほしいと願いました。

先に、ご紹介しました断らなかった特養の理事長さんは、利用者の権利擁護の実践がいかなるものかを、若きMSWの私にお教え下さいました。それから30年後に、その断らなかった特養の母体である社会福祉法人が介護福祉士養成施設を開校しました。縁あって私はこの養成校の開設と同時に教員として勤務を始め、今日に至っています。

上田福祉敬愛学院は閉校となりますが、かつて私が教えを請うた福祉サービスを提供するうえで必要な神髄を、教員という立場から学生に語ってきました。その流れは卒業生の中に脈々と受け継がれています。

卒業生の多くは、学院で学んだ専門知識と実践力を活かし、介護福祉士として介護分野で活躍していますが、ここ数年、日本の介護現場では働き手が足りず、人材不足が深刻な状況にあります。こうした状況に追い打ちを掛けたのが新型コロナ感染問題です。施設の中には働き手がなくサービスを継続することができなくなった施設、更には倒産を余儀なくされた施設など多数でています。このまま介護人材確保が解消されなければ、介護を必要とする方々に十分な介護サービスを提供できなくなる可能性もあり、今後の地域介護体制に大きな課題を残しています。

卒業生は、ひとりひとりが個性を持ち、能力も一応ではありませんが、教育は百年の大計と言われます。長期的なスパンで末永く見守り育てて欲しいと願っています。

末筆ではありますが、長年にわたり本学院の教育活動にご理解ご支援を賜りました、すべての皆様方に教職員一同、心より深く感謝申し上げますと共に、皆様の今後のご健勝とご発展を心よりお祈り申し上げます。

上田福祉敬愛学院
学院長 **深瀬 文啓**





一所で一緒 チーム 敬老園

No.17

しおがわ敬老園
特別養護老人ホーム
介護職　主任
黒澤 武彦

上田福祉敬愛学院の第6期生。介護福祉士としての知識・技術はもとより「気配りやチームワーク」を大切にする心で、ご利用者と向き合っています。



上田福祉敬愛学院での学びが介護現場で活かされている!

「ご利用者の思いに目を向ける大切さと難しさ」…授業や演習で積み重ねたことでも、いざ施設実習で実践してみると1つ1つが難しく感じ、それを同時に行うことができませんでした。個別ケアプラン作成時、身体的な介助ばかりを考えてしまい、ご利用者の思いに目を向けることができませんでした。指導職員の方から「ご利用者の話を聴きながら、内面を考えることで視点が変わってくる。」とアドバイスをいただいた経験が“次は、できるようになろう!”と、いつも自分自身を前向きな気持ちにさせてくれます。

「言葉の選び方」…挨拶や日々の声掛け、何気ない会話でも「ご利用者が分かりやすい言葉で話しをする」ことを意識しています。特に初対面の際には、まず自分自身のことを話し、共通する点を見つけながら気持ちの距離を縮めていくようなイメージでいます。その積み重ねで、人としての安心を感じていただけるようになればと考えています。

「レクリエーションの組み立て」…様々な行事を企画する際に、参加するご利用者の身体状況や促しを行う時の声掛けについて流れを組み立てていく際に気を付けるポイント・考え方を学んだことが現在でも活かされています。

今後の目標を教えてください!

教育面のことになりますが、外部環境が目まぐるしく変化する状況の中で、新しい生活様式やその時々の状況に柔軟に対応した導きをできるようにしたいと考えています。介護は、チームでご利用者の生活を支えています。1人でできることは、限られているためチームとして目指す方向性を共有し、足並みを揃えたケアを実践していきたいです。また、既存の概念に縛られず、何事にも前向きに挑んでいける後進の育成と自分自身も成長し続けていければと考えています。

私たちは多種多様な職種がそれぞれの役割を果たすことで利用してくださる方に「敬老園があって良かった」と思っていただけるようハツラツと毎日を過ごしています。



黒澤さんの在校時のスナップ

当法人では、上田福祉敬愛学院卒業生101名(令和3年4月1日現在)が介護現場で活躍しています。学院で学んだ「福祉の心」が、敬老園の理念をより確かなものにしています。

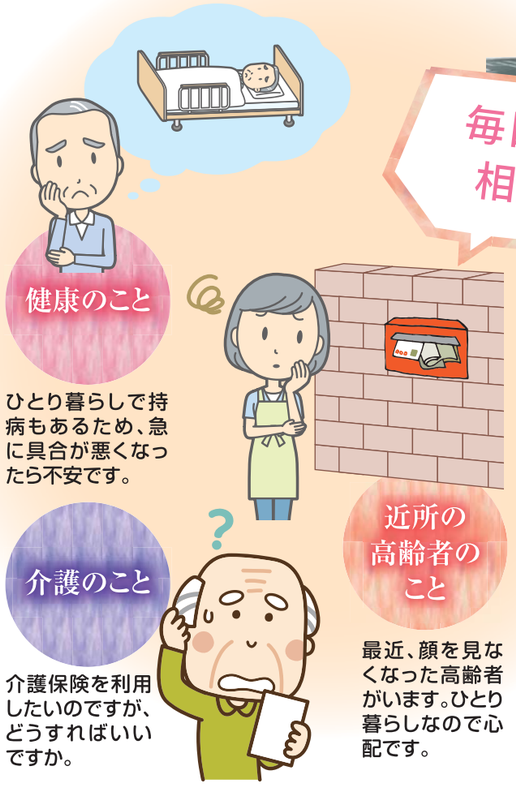


令和3年4月1日から 上田市西部地域包括支援センターを 敬老園が上田市から受託いたします。

敬老園本部の1階に上田市西部・塩尻地域(自治会名:下紺屋町、鎌原、西脇、新町、諏訪部、生塚、常磐町、緑が丘、新屋、緑が丘北、緑が丘西、城北、秋和、上塩尻、下塩尻)にお住まいの高齢者の皆様が気軽に相談できる窓口を設置いたします。



毎日の生活の中で、不安なことや相談したいことはありませんか?



健康のこと

ひとり暮らしで持病もあるため、急に具合が悪くなったら不安です。

介護のこと

介護保険を利用したいのですが、どうすればいいですか。

近所の高齢者のこと

最近、顔を見なくなった高齢者がいます。ひとり暮らしなので心配です。



上田市西部地域包括支援センター

上田市常磐城2256−1(敬老園本部1F)

☎0268-71-5712

相談日　月曜日〜金曜日　定休日　土・日・祝日　時 間　8:30〜17:30

2020 敬老園

広報の力で福祉のイメージを変えていく!

写真コンテスト開催!



今回で2回目となる写真コンテスト。応募テーマを「ご利用者部門 ～笑顔～ 」「職員部門 ～私のやりがい～ 」とし、作品募集を行いました。また、法人全体で一体感をと、全役職員1,200名の投票で受賞作品を決定しました。

心と心の結びつきを理念に掲げる私たちの生活は、コロナ禍で多くの制約を余儀なくされ、大切な家族に会えなかったり、毎年恒例としていた行事ができなかったりと非接触・非対面が当たり前になりつつあります。そんな日常の中にも、時間を共にしていることで感じる人の温かさや優しさが確かにあることを認識できた気がします。

ご利用者部門 〔テーマ〕～笑顔～

最優秀賞



『幸せの日課』
ふたりで一冊の歌の本。共通の趣味で自然とあふれる笑顔。穏やかな日常の1コマです。

優秀賞



『ウリァー!』
午後のレクリエーションの1コマ。
的当てゲームにハッスルするTさん。その結果は如何に?

優秀賞



『願いよ届け』
法人発祥の地 にしうち敬老園の裏にある観音様にご挨拶をすることが日課。早くコロナが収まりますように…。
いつも私たちを見守ってくださり、ありがとうございます。

職員部門 〔テーマ〕～私のやりがい～

最優秀賞



『Girls talk!』
#女性同士の会話です #話始めると止まりません #もちろん恋愛相談です

優秀賞



『新しいカタチの夏』
コロナ禍の納涼祭。ご家族の皆様にはご参加いただけませんでしたが、浴衣を着た職員と一緒に。たくさんの笑顔がはじけていました。

優秀賞



『何気ない日常』
普段から笑顔を絶やさず向き合うA職員。
入居者様も柔和な表情を返しておられました。
何気ない日常の中に私たちの“やりがい”があります。

